

おおさか

KEY わーど

第
77
回誰が還暦やねん！
「万博かて知ってるねんで」と十円玉が語る

高校の同期会の年賀状に、ことし我々の学年も還暦を迎えるので、それを祝賀する会を秋に開催したいとの案内があった。そんな歳になったかという思いとともに、同期生の大半は目出たく平成29年に六十歳になるが、早生まれの私が還暦になるのは、明けて平成30年2月ではなかったか。

JR大阪環状線に喩えれば、大阪駅から内回りを出発して、仲間の大半はぐるりと廻って大阪駅に戻ったが、私はまだ天満、桜之宮回り。天王寺発の外回りならば、天王寺に到着する前の寺田町付近にいるようなものだ…。前倒しで祝ってもナァ、という感じだが、そんな案内をもらったせいか、こども時代を思い出すことが多くなったし、最近、十円玉の収集?に凝りだしたのも気になった。

自動販売機に入れた硬貨が戻ってくることもある。首をかしげながら見ると、すり切れ、ちびって、軽く小さくなった硬貨である。製造年代の刻印が、私の生まれた昭和33(1958)年だったらたまらない。そんな十円玉を見つけると、私同様に還暦を迎えるまでの歳月を、社会のなかでぐるぐるまわって摩耗したのだ、と感無量になる。

昭和26(1951)年から昭和33年に製造された十円は、縁にギザギザの溝があり“ギザ十”^{じゅう}と呼ばれる。確かに溝もそうとう摩滅している。わが身を省みて「ご苦労さん、少しお休みなさい」という気持ちもあって、同年配の野生?の十円玉を見つけると記念にとっておくことにした。

この十円玉だが、もちろん主成分が銅で、大阪は銅とゆかりが深い。江戸時代、銅を管理する役所の銅座が設けられ、全国の銅山で産出される銅は大坂の銅吹屋に集積された。かつて銅座があったとされる場所に、大阪市立銅座幼稚園や銅座公園(中央区内久宝寺町2丁目)があるし、明和3(1766)年に銅座が設置された今橋の大阪市立愛珠幼稚園^{あいしゅ}の前には、「銅座の跡」の碑が建立されている。

また、住友グループの源流であり、銅吹屋の中心となった泉屋の銅吹所が、長堀川に面する鰻谷(中央区島之内)にあり、国内の約三分の一を精錬する日本最大の銅の精錬所であったことは、遺構の一部保存とともに知られている。幕府御家人ながら狂歌で有名な大田南畝(1749~1823)は、大坂の銅座に赴任したおり、銅山を中国で「蜀山」と言うのに因んで「蜀山人」と号したが、大坂滞在中、木村兼葎堂^{けんらどう}や上田秋成とも親交をむすんだり、住友が刊行した『鼓銅図録』の題字も書いている。

そして、桜之宮には造幣局(北区天満1丁目)が設けられ、ここで日本の硬貨は造られている。造幣局には明治44(1911)年のレンガ造りの建物を改装した「造幣博物館」があるので、関係の貴重な資料を見ることができる。見に行きたい博物館だ。

昭和20年代末から30年代前半の十円玉を眺めていると、製造したてのピカピカの顔で造幣局から旅立ち、どこを巡ってきたか想像してしまう。アベベが走った東京オリンピックや大阪万博にも行ったり、開通したばかりの新幹線の車内販売や、公衆電話で大切なメッセージを伝えるため、その身を投じたかもしれない。

還暦を迎える前に、摩滅で自動販売機をしくじった“ギザ十”のふちを撫でながら、つるつとしたバブルや平成の時代の十円玉とはキャリアが違うんだよナァと、ぶつぶつ思う、メランコリックな春となりそうです。



昭和20年代から40年代の十円玉。
どことなく疲れた感じが私をなごませる…。



銅座跡の碑(中央区 愛珠幼稚園)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人ー」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イマージュ増殖するマンモス／モダン都市の幻像ー」(創元社)など。